

28

2015・November

●Published by KOBE COLLEGE

神戸女学院大学



●神戸女学院創立140周年記念特集

信仰と教育への道を 貫いた140年

創立140周年記念講演

「青春の神戸女学院」——玉岡かおる（作家）

詩を読み解き、考え方の幅を広げる——5

エレジーの変化と失われた喪失

文学部 英文学科 古村敏明 准教授

食を通して女性の生き方を探る——9

興味の追求から見えてくるテーマ

作家・生活史研究家 阿古真理さん

●女子大ならではの大学ブランド商品開発

美肌をサポートする『美容式』®アミノ酸ゼリー——11

●科目「初期神戸女学院」で自校の歴史をテキスト化

自校の原点を理解し、未来を展望する——13

●「神戸女学院大学の100冊」書評コンテスト

表彰式——14

●英文学科Field Study

ハワイにおける日系移民の歴史を学ぶ——15

●オランダの名門ダンスカンパニーに入団！

舞踊専攻の卒業生、世界を舞台に、踊る——17

KCインフォメーション——19

「信仰と教育への道を貫いた140年」



150年前の川口居留地の浮世絵

・ 創立140周年記念講演《抄録》 ・

「青春の神戸女学院」

— 美しき学び舎がくれたもの —

●玉岡かおる — Kaoru Tamaoka

・ 作家、大阪芸術大学・大学院教授、
兵庫県教育委員

1956年兵庫県三木市生まれ。1979年神戸女学院大学文学部社会学科卒業。1989年神戸文学賞受賞作『夢食い魚のブルー・グッドバイ』（新潮社）で文壇デビュー。神戸女学院の卒業生をモデルにした『銀のみち一条』（新潮社）をはじめ、『天蓮の船』、『負けるとき ヴォーリス満喜子の種まく日々』（いずれも新潮社）、『自分道』（角川新書）、『虹、つどうべし 別所一族ご無念御留』（幻冬舎）、『ひこばえに咲く』（PHP研究所）など著書多数。第25回織田作之助賞受賞の『お家さん』（新潮社）は舞台化、TVドラマ化された。最新刊は『天平の女帝 孝謙秘徳』（新潮社）。



●歴史に名を刻む先人たち

私が神戸女学院に入学したのは、ちょうど創立100周年の年でした。それから40年の歳月が経ちましたが、世の中が変化しても、18歳の頃と同じ場所、同じ空間で、同じ空気を吸うことができ、中庭や講堂などの建物もあるのと同じ温かさで迎えてくれる——それが神戸女学院の素晴らしいところだと感じています。

歴史小説家として神戸や関西、日本の歴史を紐解いていくと、そこには必ず神戸女学院に纏わる人々の足跡があり、その方達の功績に会わずして日本の歴史は語れません。私は在学中、北寮でも生活させて頂きましたが、当時はこのようなすごい歴史を知らずに過ごし、その真価がわかったのは卒業してからでした。今日は神戸女学院の140年という大河の流れ——私達がその歳月の部分部分に加わり、青春を過ごし、人生の海へ出て行き、真価を知るといふ連綿と続く流れを辿ってみたいと思います。

●創立者の来日と女学校の誕生

今から約150年前、大阪・中之島には川口居留地が開かれ、ビジネスや布教のために外国人が訪れていました。しかし、まだ街の至る所にキリスト教禁令の高札が掲げられており、外国人は川の河



Eliza Takott (1836-1911)
初代校長：イライザ・タルカット

関西における最初的女子教育機関である神戸女学院は、1875年10月、アメリカ会衆派教会から派遣された二人の婦人宣教師によって、神戸市山本通に創設された。その後、1933年にキャンパスは現在の西宮市岡田山へ移転され、今年は創立140周年の節目にあたる。10月10日、その記念行事が神戸女学院講堂で開催された。当日は、記念礼拝が守られ、森孝一院長が140年の歴史を振り返り、神戸女学院の根本であるキリスト教主義、自由教育主義を継承し続けた先人達の努力と苦勞に思いを馳せると共に、その意思を継ぎ、自律的な女性を育成する為の教育を続ける覚悟などを語った。続く講演会では、卒業生であり作家の玉岡かおる氏が、学生時代の思い出や神戸女学院に纏わる関西の歴史について話を披露。大勢の関係者や卒業生、一般の来場者が参加し、熱心に耳を傾けた。また、午後からはレクチャー・コンサートやキャンパスツアーも行われ、来場者はキャンパス内の散策などを楽しんだ。



Julia Elizabeth Dudley (1840-1906)
初代舎監：ジュリア・エリザベス・ダッドレー

お二人は、「居留地の中だけでは何も発展しない」と、勇気を持って川を越え、居留地の外へ出ていかれました。

そして、三田藩主・九鬼隆義という理解者を得て、聖書の布教活動を行いました。そこで日本人は真綿が水を吸うように聖書の教えを吸収します。お二人はこの国の少女達はまだまだ伸びると確信し、より多くの子ども達に英語、音楽、聖書を教えたいと、明治8年、神戸市山本通に寄宿学校を開校し

■創立140年を迎えた神戸女学院の歩み
2人の女性宣教師が神戸に開いた小さな私塾。これが、のちに神戸女学院へと発展する女子高等教育の原点となりました。創立より140年、変わらない理念と伸びやかな校風は、よき伝統として現在に継承されています。

▲1873 米国で教育者としての経験を持っていたタルカット、ダッドレー両宣教師が、神戸花隈村に私塾（デイ・スクール）を開く。
▲1875 創立。神戸山本通に女子寄宿学校「女学校」（英語名 Girls' School）を開校。初代校長はタルカット、舎監はダッドレー。
▲1879 校名を「英和女学校」と定める。
翌年に新たに5年制課程の女学校となる。
▲1885 高等科（1年制）を設置、校章を定める。三つ葉のクロバーを象った校章は、身体、精神、靈魂の一致調和した完全な人格の育成をめざす学院の理想を表現。
▲1891 本格的な女子高等教育を開始。
3年制の高等科を設ける。
▲1894 「神戸女学院 (Kobe College)」と改称。理化学館、音楽館、完成。
▲1906 音楽科を設置。
▲1909 専門学校令により、当時の女子高等教育の最高水準である「専門部（4年制）」を設立する。
▲1919 専門部を大学部と改める。
予科1年・本科3年を置く。
▲1933 西宮市岡田山キャンパスに移る。
伝道者・建築家ヴォーリスによるスパニッシュ・ミッション・スタイルの校舎が完成。現在の文学館、理化学館、図書館本館、音楽学部1号館、講堂・ソールチャペルを含む総務館などは当初の建物。
▲1948 学制改革により4年制の新制女子大学「神戸女学院大学」が認可され、文学部（英文学科・社会学科・家政学科）を設置。
▲1949 新制の音楽学科を設置。
▲1952 音楽学部の認可を受ける。
▲1965 大学院文学研究科（修士課程）英文学・社会学専攻を設置。
▲1967 家政学科が独立して家政学部となる。
▲1975 創立100周年を迎える。
▲1976 文学部社会学科を改組して総合文化学科とする。
▲1980 大学院の整備・充実が進む。
大学院文学研究科（修士課程）に日本文化学専攻を設置。
▲1989 大学院文学研究科英文学専攻に博士後期課程を設置。
▲1990 音楽専攻科を設置。
▲1993 家政学部を改組して、人間科学部人間科学科を設置（家政学部は募集停止）。
▲1997 大学院人間科学研究科（修士課程）人間科学専攻を設置。
▲1999 大学院人間科学研究科人間科学専攻に博士後期課程を設置。
▲2000 創立125周年を迎える。
大学院音楽研究科（修士課程）音楽芸術表現専攻を設置。大学院文学研究科日本文化学専攻を比較文化学専攻に改称。
▲2002 大学院文学研究科比較文化学専攻に博士後期課程を設置。
▲2004 大学院文学研究科（博士前期課程）英文学専攻に通訳コースを設置。
▲2005 人間科学部に心理・行動科学科と環境・バイオサイエンス学科を設置（人間科学科は募集停止）。
▲2006 音楽学部音楽学科に舞踊専攻を設置。
▲2007 音楽学部音楽学科作曲専攻をミュージック・クリエイション専攻に改組。
▲2013 大学院文学研究科社会学専攻を廃止。
▲2014 ヴォーリス設計の校舎12棟が国の重要文化財に指定される。
▲2015 大学院文学研究科（博士前期課程）英文学専攻にグローバル・スタディーズコースを設置。

・ 記念イベント & 展示 ・

■レクチャー・コンサート スクエア・ピアノで聴く明治期神戸の演奏曲

エミリー・ブラウン記念館めじらウングでは、1860年スタインウェイ社製スクエア・ピアノによる記念レクチャー・コンサートが開催された。18世紀半ばにドイツで発明されたスクエア・ピアノは、当時大変な人気を博していた。神戸女学院に来たのは1890年で、前年に赴任した音楽のラドフォード先生がカナダの故郷に働きかけて寄贈が実現。木部が柘植、白鍵は象牙、黒鍵は黒檀という上質な素材で作られている。戦後は音楽館に置かれており、1992年に修復され、日本に現存する最古の演奏可能なスクエア・ピアノとして蘇った。

当日は、音楽学部教授の津上智実先生による解説と合わせて、大学院音楽研究科(ピアノ専攻)の2年生達が実際にスクエア・ピアノで演奏を披露。神戸女学院の音楽部レッスン帳や明治期の小学校教科書にも記されているL.v.ベートーヴェン<ピアノ・ソナタ>第14番「月光」第1楽章など、スクエア・ピアノが神戸女学院で活躍していた頃の演奏曲全7曲が奏でられた。参加者は、当時の音楽部レッスン帳など貴重な資料の写真が掲載された美しいプログラムを手に、その美しい音色にうっとりとして聴き入った。



■記念礼拝

創立以来、歌い継がれている讃美歌「私の神に近づかん」に始まり、斉藤言子学長がデフォレスト先生の詩を用いた学院記念歌「Beauty Becomes a College」を独唱。森孝一院長の式辞では、イライザ・タルカット先生とジュリア・ダッドレー先生による神戸女学院の前身「Girls' School」設立の話や岡田山へのキャンパス移転、第二次世界大戦中の苦難、戦後の進駐軍による学舎接收の要請についてなど、140年に渡る歴史の要所を振り返った。

また、終戦から70年経つ今、神戸女学院が何を継承し、何を守り抜くか?あらゆる事柄を自由に議論、意見表明し、自分の信念に基づき教科書をも批判する、自律的な人格育成に必要な教育を続けることへの決意も語られた。



■記念展示

神戸女学院で学んだ作家たち

図書館本館閲覧室において、神戸女学院で学んだ作家達を紹介するパネル展示が行われた。展示作家は、『本の話』で第21回芥川賞を受賞した由起しげ子氏をはじめ、絵本作家であり東京子ども図書館名誉理事長の松岡享子氏など9人。文学部総合文化学科の学生達による解説文と共に、それぞれの代表作や貴重な生原稿などが並べられており、来館者はじっくりと展示を楽しんだ。



■文学館 展示コーナー

文学館では、文学部と人間科学部の卒業論文ポスター展示、英文学科によるField studyや絵本翻訳コンクールの報告、大学の写真部・美術部による作品展示、中高部元教諭による絵画・書・写真展示などが行われ、それぞれが日頃の成果等をアピールした。



■キャンパスツアー

希望者を対象に、学生によるキャンパスツアーも行われた。ツアーマイスターと呼ばれる学生たちが案内役となり、数名ごとのグループになって校内を一巡。建物の説明をはじめ、重要文化財に指定されたヴォーリス建築の見どころなどを紹介した。楽しい雑談を交えた案内に、参加者も一緒に盛り上がりつつの散策となり、キャンパスのあちらこちらから明るい笑い声が響いた。



語を学ぶと共に、日本文化を大切にし、日本女性としての教養を積むことが重んじられています。



▲寮生活

▼当時の図書室



開校当初の校舎の写真を見ますと、コニアルスタイルの建物に寄宿舎を備え、山の傾斜を生かして講堂があるのわかります。当時の授業は午前中が国史漢籍で、午後は英語と聖書。英

《Beauty Becomes a College》

美とは決して表面上の美しさではなく、エレガンスであり、知性であり、優しさであり、自愛である。その全てを含んだ美を学ぶ場がこのCollegeである一。

ました。通称「神戸ホーム」——これが神戸女学院の出発点です。



▲寄宿学校：通称「神戸ホーム」



▲第1回卒業生の写真

そして、山本通キャンパスで学ぶ少女はどんどん増え、より広いキャンパスを求めて同窓生達が寄付を集め、明石の大蔵谷に土地を購入します。何万坪もの土地をそっくり買収資金を寄付で集めたというのはすごいことです。結局、大蔵谷への移転は耐震性などの問題から見送られ、キャンパスは大阪や神戸に近い風光明媚な西宮北郊に移転しました。そして、移転のために奔走された当時の院長C.B.デフォレスト先生は、母国アメリカ



カとの戦争が始まったも寛容の精神をもって日本を愛し心血を注いでくださいました。

●卒業生の足跡を辿る

神戸女学院の卒業生にどんな方がいらっしやるのか、私の作品から少しお

話します。播州小野藩最後の大名の娘として生まれ、音楽部ピアノ科の第一期生である一柳満喜子さん。彼女の兄は、朝の連続テレビ小説「あさが来た」のヒロイン、あさ(モデルは広岡浅子)の娘の元へ婚養子に入りました。満喜子さんは浅子ママを慕って東京から大阪へ居を移し、音楽を学ぶために神戸女学院へ通います。そして、語学堪能だった満喜子さんを、浅子ママは現在の岡田山キャンパスを設計したW.M.ヴォーリス氏の通訳として呼びました。それがご縁で二人は結婚。二人の生涯を描いたのが小説「負けんとき」です(笑)。



▲ヴォーリス夫妻

ヴォーリス氏は太平洋戦争の中、一柳米来留(メレル)と改名し、日本に骨を埋めることを選びました。彼が敢えて戦闘帽を被り、国民服を着ている当時の写真が今も残っています。

ヴォーリス氏が設計した美しい神戸女学院の建物——明るい光が差し込み、風が通り、呼吸できる空間であるこの

キャンパスの中には「日本文化を理解し、たしなみを知る女性になり、国際的な感覚も養って欲しい」という学院の思想が現れている気がします。最後に、デフォレスト先生の言葉を確認して講演を終わりたいと思います。「Beauty Becomes a College」。美とは決して表面上の美しさではなく、エレガンスであり、知性であり、優しさであり、自愛である。その全てを含んだ美を学ぶ場がこのCollegeである。ぜひ、皆様方ももう一度、この学院の美しさを確かめながら、美しい人生とはどういうものかを見直して頂ければと思います。



▲ヴォーリス建築の音楽学部1号館

詩を読み解き、 考え方の幅を広げる

●エレジーの変化と失われた喪失

●文学部 英文学科
古村敏明 准教授
KOMURA Toshiaki

不可解なことを考え続けることで、人の心の中に隠されたもの、容易に答えに辿りつかない謎、必ずしも答えのない問いなどに興味をもつ「好奇心」が養われる。文章を書くことで、自分の思考を形にする「表現力」が磨かれる一。20年以上をアメリカで過ごした古村敏明先生は、喪失やエレジーをテーマに20世紀以降の英米詩を研究しながら、長く現地の大学で英米文学や文芸創作を教えてきた。研究者として、教育者として、英米詩の意義や文学の貢献について話を伺った。



■変化するエレジーを追って

——先生は20年以上アメリカで生活されていましたが、英米詩に興味を持たきっかけは何ですか？

アメリカの大学では最初の必修がWritingのクラスなのですが、私のクラスは特別厳しくて、一年生にはとても難解なJohn Miltonの詩集『Paradise Lost(失楽園)』が課題として出されました。何とかクラスについて行こうと毎日必死で勉強し、長時間を費やしたことで興味を持ちました。

——ご専門の現代エレジーについてお聞かせ下さい。

昔からあるジャンルで、哀歌、哀悼歌を扱う分野です。20世紀前半は2度の世界大戦に象徴されるように、多くのものが壊れ失われました。20世紀とそれ以降は、キリスト教の根幹にあるfall+redemption——落ちて救済へと向かう物語と酷似しています。もちろん、現代は無条件に救済を信じてはお

らず、過去には効力のあった枠組みが壊れ、それがないところで一生懸命新しい救いや癒しの形を見つけようとしています。現代のエレジーには20世紀の再生に繋がる姿勢が見られ、それは大変興味深いものです。

また、19世紀までの英米文学は研究対象の多くが亡くなった白人男性ですが、現代詩には多様な人種や女性、同性愛者等のマイノリティが登場し、それまで光が当てられることのなかった

背景や考え方が現れています。エレジーにおいても、19世紀までの詩にはまず喪失があり、続いて嘆き、死者への賛美、そして慰めへと向かう定型がありました。現代詩には死者への憎しみや、そもそも喪失が無いように振る舞うといった多様なアプローチが現れています。私が研究しているのは、そういったエレジーの変化と、変わっていく慰めや癒しの形についてです。

■気付かない中での喪失

——今、扱われている題材は？

見えない喪失について着目し、『Poetry of Lost Loss(失われた喪失の詩)』という著書を執筆中です。例えば、ホロコースト(ユダヤ人の大量虐殺)生存者の2世達は、実際にホロコーストを体験してはいないけれど、喪失体験を伴わない喪失感を抱えています。そのことを現わす象徴的な詩にMalika Hefetz-Tusmanの『Cellars and

Attics(地下室と屋根裏部屋)』があります。通常、何代も続いた家の地下室には祖先や家族の遺品が多く置かれている。けれど、一人しか残っていない生存者にはそれらの品がないという内容です。普通に祖先が生きていればあったはずの物を失っており、それは元々存在しないため、あるのかないのか曖昧な喪失感を抱えて生きているという詩です。

私は、現代は何か根底のところに喪失感があると感じています。この喪失感の根源の一つは、19世紀で歴史が終わったように感じられたこと。もう一つは、20世紀前半の2つの大戦によって多くのものが失われたこと。その後の20世紀において、当時の人々には喪失の実感があつたはず。しかし、私を含め70年代生まれ以降の人々は、既に何かが失われた後の世代。喪失自体には直接関わりがないけれど、Tusmanの詩のように根底の部分で何かが欠け、普段は意識に上らない喪失感を持っているのではないかと



▲論文掲載の『ELH』



*“the absence of the imagination
itself has to be imagined”*

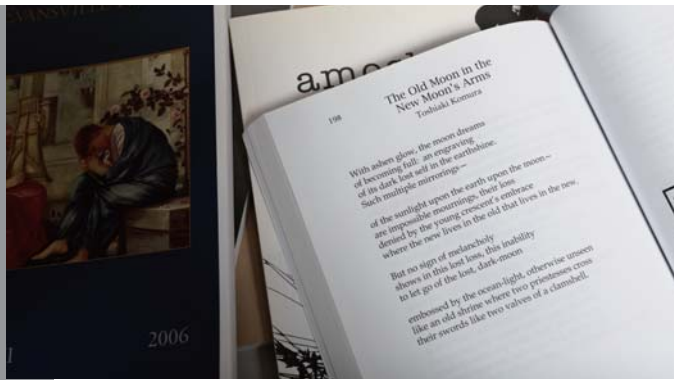
「想像力の欠落ですら、想像力によって認識される」
—ウォーレス・スティーンズ—: “The Plain Sense of Things” から

▲自作の詩は、全てパソコンで。手書きすることはない

▼詩の掲載誌は数多い



■古村敏明(こむら としあき)
アメリカのCornell UniversityでM.F.A.、University of MichiganでPh.D.を取得。子どもの頃からアメリカに在住。両大学やオハイオ州の大学で英米文学、文芸創作、Academic Writingなどの教鞭を執り、2015年より神戸女学院大学に着任。専門はアメリカ詩、Lyric Poetry、エレジー、文学と心理学・精神分析、Creative Writing、Academic Writing。研究テーマは「現代詩におけるエレジーの変化について」他。



部不要論が台頭しています。諸外国ではどう捉えられているのでしょうか？

これは世界的な動きでもあると思います。アメリカでも文学より作文等のスキルを高める方がよいとされているすし、外国語の授業も減り、実用性に重きを置く風潮があります。ただ、アメリカには「大学は多様性があるべきだ」「一見いらぬとされるものも取っておく」という理念がきちんと根付いているので、なくなるということはありません。

文学、英米文学の実用性はなかなか計れませんが、根源的なところで何を学び得るのか？という点、先述の考え方の幅や選択肢に加え、受け答えの能力があります。読んだものを正確に理解し反応する訓練が文学であり、これはどの仕事に就いても使う能力。仮に

科学者であっても、成功している人は自分の研究について言葉で表現できます。文学など人文社会系の能力には実用性があり使っている。にも関わらず、気付いていない人が多いことに私は懸念を抱きます。

——文学が排除されると、どうなると思いますか？
実用性とは別のところで失うものが多いとも思います。理工系や経済学など、社会的要請の高い分野は社会や生活形成する上で必要なものですが、仮に生活が成り立ったとして、その人生で何をしていくのか？それを考える際、答えを出すのは人文社会系の能力です。例えば、本。アンテナを立てていない人にとっては只の文字が書いてある物ですが、意味合いやよさが分かる人にとっては別の物に見える。絵画や映画観賞、旅の体験など、同じ体験でもそこから何を感じ取るかによって、全く違うものになってきます。この感受性は、生活をより豊かに導きうるものです。

人生により多くの選択肢を増やすのが人文社会系学問の貢献であり、その損失はとても大きいのではないのでしょうか。
私は「文学は人生の実験室」だと考えます。科学分野において、事象や仮説を確認するために実験を行うように、文学は、人生体験を実験する場なのです。日本には「無用の用」という言葉があるでしょう？「たまたま今は自分

達が理解できないもの」に対する寛容性を持つるとよいのではないかと思いますね。

■多様な「喪失」を探る

——「自身も詩をお書きになりますか？

高校生の頃から日常的に書いていて、今も詩や小説を扱う文芸誌『Willow Review』などに投稿しています。詩はコンパクトに考えを表現できるのでいいんです。旅行しても写真は撮らず、面白いものを見たり何か気付いたりしたらスマートフォンやパソコンにメモしておいて、そこから書き起こしています。

——今後の展望をお聞かせください。

当面の目標は先述の著書の執筆ですが、別のプロジェクトも手掛けているのでこれらを進めていきます。一つは「翻訳文学に生じる喪失」について。翻訳は、一つの言葉から別の言葉に変換される際に何かが失われると言われています。その喪失とは何なのか？或いは失われてはいないのか？に関する研究です。

そしてもう一つは「間接的な喪失」について。例えば最近、波打ち際に横たわるシリア難民の子どもの写真がニュースとして公開され、大変な反響を呼びました。そのように、自分が直接関係していかなくても感じる喪失感や、そこで生まれる他者との共感にはどのような限界があるのか？共感に比重を置き、研究していく予定です。



これから社会に出る方には、家事は一人で背負わず、助けを求めながらすればいいんだよと言ってあげたいですね

震災を経て ノンフィクション作家に

そして学び始めた社会調査の授業で、作家・沢木耕太郎氏の著書『人の砂漠』に出会った。社会の片隅で生きる人々を見つめたノンフィクション集。「そのルポを読み、なんて面白そうな仕事なんだ！私も沢木氏のようなノンフィクション作家になりたい！」と思いましたが、子どもの頃から書くことが大好きだった阿古さんの、将来の目標が定まった。

卒業後、阿古さんはフリーになることを見据えて広告会社に就職。コピーライターとして食や住の分野に携わり、それなりに充実した日々を送っていた。阪神・淡路大震災を経験したのだ。「今までフリーになるのが怖くて踏み出せずにいた。けれど、本当にやりたいこ

見えてきた仕事の軸

次々と著書を出版している阿古さんだが、東京生活のスタートは必ずしも楽ではなかった。「誰も私の背景を知ら

とをやらなくては」。意を決して退職。しかし、すぐに軌道には乗らなかった。書きたいけれど、何を書けばいいのかわからない……。模索を続ける中で友人から耳にしたのが、女性が差別されている職場の現状だった。就職後の差別が激しかった90年代。「彼女達の迷いや挫折などから社会の問題を浮き彫りにできるのではないか」。

関西での出版は厳しいという現状を前に、折しも東京在住のパートナーとの結婚話が持ち上がり、阿古さんは東京進出を決めた。そして、自身初のノンフィクション『ルポ「まる子世代」変化する社会と女性の生き方』を世に送り出した。

食を通して 女性の生き方を探る

——興味追求から見えてくるテーマ——

●作家・生活史研究家

阿古 真理 さん——AKO Mari

働く女性の時代に必要とされたのは、かつての料理の常識をくつがえす時短料理。外食が日常化し、家庭料理にも変化が生じている平成の時代に求められるのは、バリエーション豊かなレシピの数々。時代によって移り変わる食卓や料理に着目し、女性の生き方や価値観、社会の変化を浮き彫りにした著書を出す生活史研究家、阿古真理さん。食や暮らしをテーマとする背景や、日々の生活について話を伺った。



食卓をリードしてきた料理研究家達を分析し、家庭料理や女性の生き方の変遷を論じた最新作『小林カツ代と栗原はるみ』。小説やマンガに登場する家庭料理を分析し、家族や社会の変化と共に読み解いた『昭和の洋食 平成のカフェ飯』他▶



図書室から始まった食への興味

「暮らしと直結しているもので、食のことやそれに纏わるのが大好き。どうやら私はかなりの食いしん坊みたいですよ(笑)。食や暮らし、女性の生き方をテーマに研究、執筆活動を行う阿古さん。食に興味を抱いたのは、小学生の頃だという。くまのプーさんを始め、メアリーポピンズ、赤毛のアン……と、その頃に読んだ児童書にはたくさんの食べ物が登場し、その味を思い描くのが楽しかった。

中学から神戸女学院へ進学。図書室で食に関する多くの本と出会った。イラストがふんだんに盛り込まれた『料理の絵本』、土井勝氏や入江麻木氏の本格的なレシピ本、海外の料理やお菓子の本……。阿古さんはたくさんの本を借り、次々とそのレシピを書き写した。『お菓子のレシピを書くことで各国の食文化の違いが見えた。違ふことが面白かったんです』。

社会学との出会い

世界の食文化に触れたからなのか、高校生になると阿古さんは日本語の語源や日本人のルーツにも興味を持ち、大学で文化人類学を学ぶつもりだった。しかし、2回生の時、社会病理学の授業でバチンコが研究対象になると知り、その意外さに衝撃を受ける。俄然、社会学に興味を湧き、進路を変更した。

仕事と生活の融合

多忙な阿古さんに、生活について尋ねると、「個人的にもワーク・ライフ・バランスの問題で悩んだ時期もあります。でも、今は収斂する形でやりたいことをやっているのので全てが面白いです」と返ってきた。仕事の日は取材や打ち合わせに出かけたり執筆し、夕方には家族のご飯を作る。そこには本から得たコツが活かされる。休日には食文化の本や小説を読む。それにより知識が増え、文章構成力が養われる。歳を重ねることに仕事と生活は融合し、家事の要領もよくなった。「女性は家事により搾取される部分もあるけれど、ご飯を作って人に食べさせる事には喜びもあると気付き、楽になりました。これから社会に出る方には、家事は一人で背負わず、助けを求めながらすればいいんだよ」と言ってあげたいですね。



■阿古真理(あこ・まり) 1968年兵庫県生まれ。1991年 神戸女学院大学 文学部総合文化学科卒業。大阪の広告会社勤務を経てフリーランスとなり、1999年東京へ進出。食や暮らし、女性の生き方等をテーマに執筆。著書に『うちの60年 祖母・母・娘の食卓』『昭和の洋食 平成のカフェ飯』『小林カツ代と栗原はるみ 料理研究家とその時代』『和食って何?』等がある。



女子大ならではの大学ブランド商品開発

美肌をサポートする『「美容式」®アミノ酸ゼリー』

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科が開発



▲『「美容式」®アミノ酸ゼリー』が開発された実験室にて

たほか、現在もキャンパス内の「ピゴの店」や有限会社PEC・ORの通販サイトでも順調な売れ行きを見せている。開発の指揮を執った高岡先生、ゼミ生の垣田さん、古賀さんに、その背景や手応えについて話を聞いた。

今年5月、人間科学部環境・バイオサイエンス学科の高岡素子ゼミの学生達が、美肌効果があるとされる8種類のアミノ酸を配合した『「美容式」®アミノ酸ゼリー』を開発した。味はレモンジンジャーとリンゴの2種類。ゼリー1カップあたり220mgのアミノ酸が配合されているほか、国産果汁や北海道産のビートグラニュー糖、岡田山のセイヨウミツバチから採集した自家製ハチミツ等、良質な原材料にこだわりをみせている。

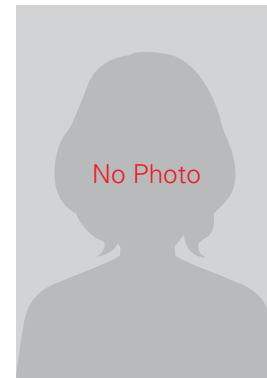
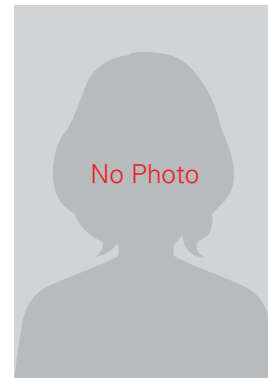
アミノ酸研究の第一人者である大谷勝氏とのコラボレーションにより商品化が実現し、既に愛校バザーや岡田山祭で販売して好評を得



「美容式」®アミノ酸ゼリー 開発秘話

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科4年生

古賀 さん
垣田 さん



——開発のきっかけを教えてください。
古賀 最近、他大学でも企業とのコラボ商品が開発されており、私達も大学ブランド商品を開発したいと思いました。ゼミ生全員にアンケートを取り「夏頃に発売するならゼリーがいい!」と決めて、女子大なので、アミノ酸が美容に効果があることをアピールする商品作りを目指しました。

垣田 高岡先生がアミノ酸の機能性について研究をされているので、アミノ酸配合の商品作りが前提でした。アミノ酸を一定期間摂取すると、肌の水分量やハリ、弾力等がアップすることが報告されています。そのことを多くの人に知ってもらい実感して欲しいと思いました。
——どうやって味を決めたのですか?
垣田 先生は生姜の機能性についても研究されているので、一つはジンジャー味と決まっていました。ジンジャーは苦手な人もいるし、キツすぎると食べづらい。なので、レモンを入れて食べやすくなりました。食べた後に、ジンジャーの香りがほわっと口の中に広がるんですよ。もう一種類は、皆で意見を出し合いながら試作を重ねました。イチゴや桃等が候補にありが、メロンはダメだったね(笑)。
古賀 ジンジャー味が特徴的なので、もう一つはノーマルな味にしようと、リンゴに決定しました。
——どのような点が難しかったのですか?
垣田 アミノ酸量が多いと磯臭さが出てしまうのが問題でした。臭みを消すために香料を入れるのですが、香料が多いと素材の良さが薄まりコストもかかるので、そのバランスが難しかったです。

古賀 作っては皆で試食し、試行錯誤して配合を決めました。結果的にとても食べやすくなったと思います。

——パッケージのデザインも自分達で考えたそうですね。

古賀 いくら中身がよくてもパッケージが今イチだとお客様に伝わらないので、デザインには力を入れました。一人一案ずつ提出し、アンケートを取って選びました。皆、女学院の校舎が好きなので、それが生かされましたね。

垣田 見た目がよくないと、まず手に取らない。でも、女学院のマークが入っていたり、建物のイラストが可愛ければ、記念に買ってみようかなと思って貰える。「見た目を人口に購入して貰おう。食べて美味しいと思えば、また買ってくれる」そう考えて、こだわりました。

古賀 最初はゼリーの容器ももっと開けにくかったし、食べ辛かったんですよ。垣田 ハート型の容器とかも考えたよね。あと、1個だけハート型を入れる案もありました。コストの関係でここまで出来ませんでした。600円は買いやすさのギリギリ。私達学生が手に取れる価格に抑えられたかなと思

います。

——販売の手応えはありましたか?

垣田 愛校バザーの試食で「美味しい!」と言っていただけ、予想以上の大勢の方に購入して貰えたのが嬉しかったです。5時間程で約700袋も売れたんですよ。

古賀 会社で配ると言って箱単位で大人買いしてくださる方もいました。オープンキャンパスでも、商品のことを新聞やホームページで知った方が買いに来て下さって感激しました。

——今後の抱負をお聞かせください。

古賀 コストの問題もありますが、サプリメントと比べるとアミノ酸含量が低いので、もう少し多く入れられないか検討してみたいです。

垣田 アミノ酸は美容や健康に効果があること。そして、不規則な食生活では十分に摂取できないこともあり、食事にゼリーやサプリを補う方法もあるということをもっと広めていきたいです。

担当教員に聞く

研究成果の発信で理系学科をアピール



●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科
高岡 素子 教授

本学に理系学科があることは、まだまだ世間に浸透していません。研究成果を発信することで、環境・バイオサイエンス学科の存在を知っていただく。その一つのツールとして、今回『「美容式」®アミノ酸ゼリー』の商品化に至りました。

アミノ酸は何十種類もあり、それぞれの機能が明らかにされています。その中から、コラーゲン再生などの美肌効果を持つと考えられるプロリンやアラニン等の8種類を私の方で選定し、甘みや苦み、後味等の項目を数値にして評価する官能検査を学生達と行い、味やコストとのバランスをみながら配合量を決めました。若い世代はある程度の食べ応えを好むため、ゼリーの食感も重視しました。また、国産果汁をはじめ、自家製ハチミツやフランスメーカーの香料等、材料全てを追求して使用しています。

開発にあたって驚いたのは、学生が「中身よりパッケージだ!」と言ったこ

とです。実は私、透明の袋に入れて括って売ればいいと思っていました(笑)。彼女達はパッケージに校章を入れたり、建物のイラストの窓を透明にくり抜いたり、リボンの色にまでこだわって、中身のよさだけでなく、消費者の購買意欲をそそる商品を考案しました。

商品化には、10数年前から研究指導いただいている大谷勝先生や本学人間科学部の遠藤知二先生にもご協力を仰ぎ、遠藤先生には先生の研究室で研究しているセイヨウミツバチから採取したハチミツを提供して戴きました。このミツバチは現在2箱飼育されていますが、生態系を崩す可能性があるため、それ以上は増やさないそうです。毎年採れるとも限らないため、とても貴重です。

販売を委託しているPEC・ORからは、卒業生等からの問い合わせが多いと伺っています。私達は若い世代向けに作ったのですが、40〜60代の方によく売れていて、これは嬉しい誤算です。肌が荒れている人はアミノ酸量が減少しているという研究結果もあり、アミノ酸の配合量は多いほど効果があるとされます。また、アミノ酸は摂取するタイミングにより効果が異なり、肌には夜摂っていたくがおすすめるので、ぜひ寝る前に召し上がって欲しいですね。

第1回 書評コンテスト・表彰式

専門分野への関心が深まる『神戸女学院の100冊』にトライ！

内容を正確に把握し、自己の意見を持つ



【審査結果】	CONGRATULATIONS
●高校生部門	
＜最優秀賞＞	：該当者なし
＜優秀賞＞	：●大阪女学院高等学校3年 西崎 さん 経済学・法学・国際関係論分野 『緒方貞子—難民支援の現場から』 東野真（2003）
●プール学院高等学校2年 和田 さん	環境・生態科学分野 『フィンチの嘴 ガラパゴスで起きている種の変貌』 ジョナサン・ワイナー（樋口広芳・黒沢令子訳）（2009）
＜佳作＞	：●プール学院高等学校2年 村井 さん バイオサイエンス分野 『理系の子—高校生科学オリンピックの青春』 ジュディ・ダットン（2012）
●和歌山信愛高等学校2年 岡本 さん	心理行動科学分野 『高校生のための心理学』 松井豊（編）（2000）
●プール学院高等学校2年 大浦 さん	心理行動科学分野 『こころ』の本質とは何か—統合失調症・自閉症・不登校のふしぎ— 滝川一廣（2004）
●大学生部門	
＜最優秀賞＞	：該当者なし
＜優秀賞＞	：該当者なし
＜佳作＞	：●神戸女学院大学文学部総合文化学科3年 藤目 さん 宗教学分野 『聖書の読み方』大貫隆（2010）

＜優秀賞＞（高校生部門）
プール学院高等学校2年
和田 さん

受賞者の声

▼【選択図書】
・環境・生態科学分野
『フィンチの嘴 ガラパゴスで起きている種の変貌』
ジョナサン・ワイナー（樋口広芳・黒沢令子訳）（2009）

私は文章を書くのが苦手なので、先生から「選ばれたよ！」と聞いて、とても驚きました。この本を選んだ理由は、小学校の時に授業でフィンチのことを習ったからです。教科書にも載っていて、馴染みがあったんです。フィンチの進化と昔飼っていたカブトムシのツノの変化について、考えが結びついたので、そのことなども書きました。でも、実は虫はそんなに得意ではないんです（笑）。書いている時は、何度も行き詰まってしまい、なかなか前へ進まなくて苦労しました。この本に出てくるグラント夫妻は、何十年もかけてフィンチの研究をされています。私もその姿勢を見習って、苦手なことでも諦めず、コツコツとがんばっていききたいと思います。

神戸女学院大学高大連携協定校の在校生、及び神戸女学院大学の学生が書評を競う「書評コンテスト」の表彰式が、10月24日、社交館KCCルームで執り行われた。

神戸女学院大学はリベラルアーツ&サイエンス教育を奨励する副専攻プログラムを設けており、その学びをより充実したものとするために、19分野の基本図書を『神戸女学院の100冊』として推薦している。このコンテストは、その中から1冊を選び、内容を正確にまとめ、自分の意見を紹介するというもの。高校生が自由に自身の関心を深める機会として、また大学生が専門的関心をさらに広げ、新たなヒントを得ることを目的とし、読書感想文とは異なって、より他者を意識し、内容理解や意見に責任を持って書くことが求められた。

第1回目となる今回は、高校生部門69作品、大学生部門4作品の応募があったものの、両部門とも最優秀賞の該当者は選出されず、高校生部門には優秀賞2人、佳作3人、大学生部門には佳作1人が選ばれた。



＜優秀賞＞（高校生部門）
大阪女学院高等学校3年
西崎 さん

受賞者の声

▼【選択図書】
・経済学・法学・国際関係論分野
『緒方貞子—難民支援の現場から』
東野真（2003）

私は文章を書くのが苦手だったので、受賞の知らせを聞いて本当にびっくりしました。この受賞により、少し自信がついたので、これからは苦手意識を持たず、もっと文章力を養いたいと思います。この本を選んだのは、発展途上国へ実際に行き、難民を助け、世界的に注目されている日本人女性がいると知ったからです。私の通う高校はキリスト教主義で、学習の一環として難民問題が取り上げられています。それがきっかけで難民には元々、興味を持っていました。大変だったのは、メモを取りながら本を読んでいたら、大切なことがとても多くて12枚にもなってしまったことです。これから、もっと多くの本を読み、しっかりと自分の意見を言える人間になりたいです。また、いつか現地に行って、アフリカの問題に触れたいと思います。

▼【審査講評】 ●文学部総合文化学科 北川将之准教授
内容理解については若干偏っている箇所がありますが、全体的によく出来た書評です。緒方氏の「怒り」についてや、国内避難民保護の決断、人道支援の両義性、国際社会と日本の市民意識など、よく捉えています。他の論点として、官僚主義批判と徹底した現場主義などを「怒り」等に連関させるとさらに良くなるでしょう。また、もし自分だったらと想定したり、緒方氏の真意を読み取ろうと、自身の親子関係に視点を置き換えたりしている点でも優れています。



▼【審査講評】 ●人間科学部環境・バイオサイエンス学科 遠藤知二教授
研究現場の生き生きとした描写が、この本のワクワクする部分です。研究のためにガラパゴスへ赴いたグラント夫妻には十分な理由があったのだと思いますが、和田さんのように、「そこまで行かずとも進化の研究はできたのではないかな？」と考えるのも大切なことです。近年、カブトムシのツノの進化発生学研究も進んでいるようです。まだまだ謎を秘めているかもしれません。ぜひ、和田さん自身がその心意気を受けとめてください。

Finding our origins

Vistas

TOPICS

トピックス

自校の原点を理解し、未来を展望する

◎科目「初期神戸女学院」で自校の歴史をテキスト化

神戸女学院大学は、1995年から「初期神戸女学院」という科目を設置し、草創期の歴史に光を当ててきた。それは、単に出来事の積み重ねを語るためではなく、本学院がいかなる祈りの中を歩んできたかについて意識の共有を促すとともに、自校の原点を理解したうえで現状を評価したり、未来を展望したりすることのできる学生を育成するという目的をもつ。受講生が100名を超える年も多く、学生による授業評価アンケート等からも、その願いは叶えられていることが読み取れる。今年度後期からは、新たに教科書として『山本通時代の神戸女学院 黎明期の女子教育とその歩み』を導入。その編纂に携わり、授業を担当する飯先生と津上先生に話を伺った。



『山本通時代の神戸女学院 黎明期の女子教育とその歩み』

●文学部教授(キリスト教学)
飯 謙 先生 —— II Ken

●音楽学部教授(音楽学)
津上 智実 先生 —— TSUGAMI Tomomi

◀出版本お申込先「神戸キリスト教書店」TEL：078-331-7569

——「初期神戸女学院」へのテキスト導入について、その背景や内容をお聞かせ下さい。

飯 本学は2014年に共通英語教育のオリジナルテキスト『A Portrait of Kobe College』を導入しました。そこには英文で自校の略史が記されています。すけれど、学生からその副読本となる初期の歴史を紹介する書籍を求める声が上がりました。それにより、必要となりました。

津上 テキスト作成には、本学院の創立140周年を迎えるにあたって、出発点を振り返り未来を構想するための一助となるようにという願いを込めました。

授業では本学院の成立と初期の教育の歩みを、根幹となる「キリスト教教育」、それを支える「英語教育」と「音楽教育」、成果の現れである「卒業生の活躍」の4つを軸に、4名の教員が1学期のオムニバス形式で講じます。同窓会についても、さらに今年度からは体育教育についても時間を設けています。

飯 授業の担当教員は、必ずしもその専門でないのも特徴の一つです。例えば、私の専門は古代の宗教史や旧約聖書学です。教員それぞれが専門分野から少しずつウイングを伸ばして授業を作っていることは、本学院のリベラルアーツ&サイエンス教育を象徴するに相応しいと言えるでしょう。

—— テキストには、歴史を物語る写真や資料が多く掲載されていますね。

津上 この度の編纂にあたり、『神戸女学院100年史』をはじめ、全ての学院

史に目を通し、明治期に使われていた教科書類が図書館に残っていないかを調べました。「初期神戸女学院」の授業を担当して10年になりますが、その間、昔を知る職員の方々の協力の下、倉庫や教室の黒板裏等に足を運んで探したところ、驚いたことに1860年代のメーソン&ハムリン社製のリード・オルガンや明治大正期のレッスン帳や楽譜等、貴重な楽器や教材が多数出てきたのです。ヴォー



▲メーソン&ハムリン社製のリード・オルガンはこの教室の黒板裏から見つかった。今もヴォーリス寄贈のハモンドオルガンがここに残されている。

重要なメリットであり財産。これを守っていくのも本学院の使命だと思います。資料の中には山本通キャンパス時代の教室写真もありました。今はまだ手つかずですが、理化学教育に関しても、掘り起こせばいろいろ出てきそうです。

飯 理学館には今も当時の人体模型が残っていますし、それらのことも掘り起こして理化学教育について組み込むことは今後の課題ですね。そして、続編として岡田山時代も編纂したいね笑。

—— テキストを手にする学生に、メッセージをお願いします。

津上 学生は自分のいる場を理解し、今後の人生をふれずに生きていく手掛かりにしてください。本学院での何年間かは人生の基礎を作る大切な時期。自校がどのような精神の下で始まり今に至るのか、根底をきちんと理解することは大きな力になります。

飯 140年の歴史を知り、その中に身を置くことで、バランスのとれた観点を身につけてもらえればと思います。また、授業ではレポートを書きます。自分で言葉化し、血肉とする訓練を、しっかりと行ってください。

また、本学院の特徴的な英語教育や芸術を含むリベラルアーツ教育は、現代における私学の特色化を狙った新規事業ではなく、創設当初から一貫して目指してきたことです。それをイメー

ジする手掛かりとして、教員の皆様にもこのテキストを役立てて頂けたらと思います。



in HAWAII

Field Study
in Hawaii

● 英文学科
＜フィールドスタディ＞

ハワイにおける 日系移民の歴史を学ぶ

フィールドスタディ 参加学生の声



● 文学部 英文学科3年生
中西 さん

2年生の夏、家族とハワイへ旅行した時に「なんでこんなに日系人がいるのだろう?」と疑問を抱きました。その後、戦前に日本人が出稼ぎのためにハワイへ移住し、多くの困難に遭遇したことを授業で知り、より深く学びたいと思う今回の参加を決めました。これまで海外在住の日本人や、二世の方達の生活について学んだことがなかった

神戸女学院大学英文学科では、全学部生を対象に『Field Study』を開講している。

2015年2月4～13日の10日間、9名の学生がハワイへ渡航。日系アメリカ人の家にホームステイし、「なぜ、多くの日系人が今もなお、暮らしているのか?」をテーマに、日系移民の歴史・文化を学んだ。現地では、University of Hawaii / Kapiolani Community Collegeの共同プログラムで移民に関する講義も受け、ハワイ日本文化センターやハワイプランテーションビレッジ、老人ホーム、パールハーバー等を訪問した。

今回参加した9名のうち、現在海外留学中の3名を除く6名に話を聞いた。

ため、テーマは「戦時中のハワイでの日系人の生活、状況について」です。

現地では、老人ホームを訪問し、80歳を超えた方々が日本語でとても上手にお話しされることに大変驚きました。漢字を書くことも出来るのです。日本に住んだ経験のない方も、スクールで学び、流暢に会話されていて、「私ももつと英語を学ぼう」と、パワーを貰いました。また、パールハーバーや老人ホームで実際にアメリカ兵士として第一線で戦った方々とお話しし、戦時の日系人が直面した困難について、多くの知識を得ることができました。

これらの経験により、卒論のテーマも見つかりました。移民の言語の壁やその習得方法など、さらに深く学び、研究したいと思います。



● 文学部 英文学科3年生
小林 さん

授業で日系移民についての映画を観た際に、日本と海外を繋ぐ移民の歴史をもっと学びたいと思いました。そして、「興味があるのなら実際に行動しなくては。海外に飛び出すことで、今まで理解できなかった価値観や考えが分かるようになるかもしれない」と、フィールドスタディへの参加を決めました。

ホームステイ先で彼らの生活や家族についてインタビューしようと考え、テーマは「日系移民の生活や家族について」に。日系3世の方々に直接お話を伺うことで、彼らの熱い思いを感じ、現地でしか分からない発見ができました。

また、参加前にあらかじめ過去の出来事を勉強してからハワイへ行き、現地で日系移民の方々の当時の環境や苦労を伺ったことで、今との繋がりをより深く理解することができたように思います。海外でリサーチするのは大変でしたが、単純に過去の歴史や戦争を覚えるのとは全然違い、視野を広げることができました。

今回の経験により、世界各地で暮らす日系移民について興味を持ったので、さらに知識を増やしも一度ハワイを訪れたいと思っています。



▲真珠湾の見学



▲ハワイ日系人歴史の授業



◀真珠湾の現地ガイドによる説明



● 人間科学部
環境・バイオサイエンス学科2年生
中内 さん

「なぜ、多くの日本人が毎年のようにハワイを訪れるのだろうか?私も行ってみよう!」そう思っただけで参加しました。なので、テーマは「ハワイの文化、風土に触れる」です。

現地で真珠湾を訪れ、私と同世代の人々が戦争に参加し、国のために命を捧げたことを知って、胸が痛くなりました。もし、自分が戦争に参加したらと思っても、考えも及ばず、当時の人々に、私にはない心の強さを感じました。また、私はハワイや日系移民について全く知識がなかったのですが、様々な年代の方にインタビューをし、日本との深い繋がりについて教わると同時に、自分が日本についてさえ知らないことを痛感しました。

今、戦争の時代を生きた人達にインタビューできる機会は減っており、実際に話を伺えたことは本当に貴重な経験でした。その時代を生きた人達のおかげで、今日の平和な日本がある。ハワイ、そして日本について、これからも学んでいきたいです。

中内 さん

● 文学部 英文学科2年生

真珠湾攻撃の歴史から、ハワイには日本を好きでない人もいるし、昔の日本を悪い国だと捉えている人もいます。そういう背景を改めて感じました。真珠湾に行った時、現地のガイドさんが「日本は悪いと思いますか?」という私たちからの質問に対して「日本は日本で大変な状況におかれていたのだから、よいとか悪いとかは思わない。戦争とはそういうものです」とおっしゃったのが印象的でした。また、日系一世の方にとって、英語は過酷な環境を強いられた現地の言葉。よい印象がないため、英語を話す意思はなく、二世、三世の方達は祖父の話す言葉がわからないという現実を知り、衝撃を受けました。



● 文学部 英文学科2年生
佐川 さん

ハワイには何度か家族旅行で訪れていましたが、真珠湾攻撃の跡地や老人ホームを訪れることは、学校のプログラムの一環だからこそできることだと感じ、参加しました。

テーマは「日系アメリカ人について学ぶ」。真珠湾攻撃から70年以上経ちますが、インタビューをし、アメリカ人が日本人に対してどのような感情を抱いているのか、実際に聞くことができたのは大きかったです。

ハワイ大学で授業を受け、また、女学院の卒業生の方からお話を伺い、「私の活動範囲は日本だけではない。自分のがんばり次第で将来の道は限りなく広がっていくんだ」と気付きました。そして、今年の夏休みには初めて単身でアメリカへ渡航し、サンフランシスコでのホームステイからハワイとはまた違う様々なことを学んできました。このプログラムに参加したからこそ、海外へと歩む第一歩を踏み出せたと感じています。



▲USS Missouriの見学

▼USS Arizona Memorialに残されている戦艦アリゾナ号。今も石油が流れ出ている



● 人間科学部
環境・バイオサイエンス学科2年生
古平 さん

英語の授業でフィールドスタディのことを知り、自分は外国と日本の関係について殆ど知らなかったため、興味を持って参加しました。また、苦手な英語に触れてみようという気持ちもありました。

特に印象的だったのは、「Japanese Culture Centur」で伺った話です。当時の人々が「仕方がない」「我慢」などの言葉を胸に長時間労働をしていたことや、お弁当を外に置いておかねばならず、蟻の入ったご飯を食べていたことなどを知り、日系移民の人々の苦しみや困難が伝わってきました。

行ってみて何よりもよかったのは、やはり現地の空気に触れたこと。今回の参加が考えのきっかけになり、日系移民についてもっと知りたいと思うようになりました。

オランダの名門ダンスカンパニー 《ネザーランド・ダンス・シアター》に入団

— Netherlands Dance Theatre —

世界を舞台に、踊る 舞踊専攻卒業生、プロダンサーとして海外へ

●ネザーランド・ダンス・シアター(NDT)ダンサー

三崎 彩 さん — MISAKI Aya

世界に名高いダンスカンパニー「ネザーランド・ダンス・シアター」。
オランダのハーグを拠点とし、ヨーロッパやアメリカを中心に
コンテンポラリーダンスを主とするオリジナル作品を上映している。
今年1月、その入団オーディションが行われ、
世界各国から集まった約300人の応募者の中から5人のみが合格を果たした。
三崎彩さんはその狭き門をくぐり抜けた一人。7月にはドイツ公演で初舞台に立った。

▼ 恩師との出会い

「二人でも多くの方に、あの人の踊りが好き!と言われるダンサーになりたい」。5月からオランダの名門ダンスカンパニーNDTで活動する三崎さん。「元気が余っているから、何か身体を動かすことを」と、4歳の時に両親がクラシックバレエに通わせてくれたのが、ダンスを始めたきっかけだ。

中学1年生の時、神戸女学院大学の舞踊専攻開設に伴う夏期講習会に参加。「島崎徹先生という世界的な振付家に教えてもらえるよと聞き、受講しました。先生は、技術だけではなく人と人が会話するような踊り、本能の踊りについて熱く語ってくださいました。私が望むダンスがここにある!と衝撃を受け、大学は神戸女学院に行こうと決めたんです」。

▼ 自立したプロダンサーに

海外を意識したのは大学3年生の時。日本でダンサーとして生計を立てるのは至難の業。卒業後は自立したいから

プロになるのは無理だと思っていたところ、「海外のカンパニーにだって入れるのに、なぜ頑張らない?」と、島崎先生に怒られた。その言葉に後押しされ、ヨーロッパのカンパニーをいくつか訪問。レベルの高さと環境のよさを目の当たりにした。「海外でならダンスで食べていける」——プロを目指す意志が固まった。

▼ ダンスは、全てを映し出す鏡

難関を突破し入団したNDTでの初舞台は、いきなりの7月。三崎さんの所属は若手中心の「Ⅱ」。入団は9月の予定だったが、ベテランダンサー中心の「Ⅰ」で欠員が出て、声がかかったのだ。「皆がベテランで、他の公演や来シーズンへの稽古もあるため、リハーサルはほぼ無し。言葉もわからず不安だったけど、本番ではお客様に気付かれない場面でメインダンサーのウィッグが取れ、その笑いのおかげでリラックスできて、気づいたら終わっていた(笑)」。

三崎さんにとってダンスとは何か尋ねると、「自分自身」と返ってきた。ダンスには普段の自分が全て出るため、行き詰った時は自分の言動を省みるようにしているという。「日本から海外へと環境が変わったので、これまでとはまた違う自分が見つかるはず。楽しみだし、もっともっと幅を広げたいと思います」。



■三崎 彩(みさき・あや) 2015年 神戸女学院大学音楽学部 音楽学科 舞踊専攻卒業。同年オランダのネザーランド・ダンス・シアターに入団。所属は10~20代の若手ダンサー中心の「Ⅱ」。7月には、ベテランダンサー中心の「Ⅰ」によるドイツ公演「Spiritworking」の役役に抜擢され、プロとして初舞台を踏んだ。



▲バレエ発表会での三崎さん(小学校6年生頃)



NDTⅡデビューの舞台(シンガポールにて)

Dancing on the world stage



講演会・公開講座・コンサートなど

秋季公開講座2015

- 戦後70年
第1回：11月21日(土)に終了しました
第2回：11月28日(土)に終了しました
第3回：「戦争に負けたということ」
日 時：12月5日(土) 10:00～11:30
場 所：神戸女学院講堂
講 師：内田 樹(神戸女学院大学名誉教授)
※小学生以下のご入場はご遠慮ください。
問い合わせ先：広報室 TEL 0798-51-8585

音楽学部演奏会・公演

- 定期演奏会
日 時：11月29日(日) 16:00開演
場 所：兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール
入場料：1,000円
- 第7回舞踊専攻卒業公演
日 時：12月10日(木) 18:30開演
12月11日(金) 18:30開演
12月12日(土) 13:00開演、18:00開演
場 所：神戸女学院大学エミリー・ブラウン記念館地下2階スタジオA
入場料：1,000円
- オペラ実習発表会
日 時：2016年2月10日(水) 開演時間未定
場 所：神戸女学院講堂
- 卒業演奏会
日 時：2016年2月22日(月)～24日(水) 予定
場 所：神戸女学院講堂
- 舞踊専攻第10回公演
日 時：2016年3月3日(木)
2016年3月4日(金)
場 所：神戸文化ホール
入場料：未定
- 修了披露演奏会
日 時：2016年4月13日(水)
場 所：兵庫県立芸術文化センター神戸女学院小ホール
入場料：1,000円
- 新人演奏会
日 時：2016年4月21日(木)
場 所：いずみホール
入場料：1,000円
問い合わせ先：音楽学部事務局 TEL 0798-51-8550
FAX 0798-51-8551 E-mail:music@mail.kobe-c.ac.jp

アウトリーチ・センターイベント

- 子どものためのクリスマス・コンサート ～音楽をイメージするってなに？～
日 時：12月12日(土)
第1部：11:00～12:00(10:30開場) 年齢制限なし
第2部：15:30～16:30(15:00開場) 小学生以上対象
場 所：神戸女学院講堂
出 演：大浦春菜・西脇恭子(ピアノ) 菊本恭子(ヴァイオリン)
土井茉莉(ヴィオラ) 黒田育世(チェロ)
蔭山晶子(クラリネット) 今中ゆり(お話)
参加費用：大人500円、子ども(19歳以下)300円 申込み要
問い合わせ先：音楽学部アウトリーチ・センター
TEL 0798-51-8584 FAX 0798-51-8551
E-mail:concertfch@mail.kobe-c.ac.jp



昨年開かれた「子どものためのクリスマス・コンサート」

金曜日公開プログラム

- キャロルを歌おう♪
日 時：12月11日(金)
場 所：神戸女学院講堂
- 新年礼拝
日 時：2016年1月8日(金)
場 所：神戸女学院ソールチャペル
- オルガンコンサート～1.17を覚えて～
日 時：2016年1月15日(金)
場 所：神戸女学院講堂
問い合わせ先：チャプレン室 TEL 0798-51-8502

高校生等参加イベント

- オープンキャンパス
日 時：12月13日(日) 10:00～15:00
2016年3月21日(月・祝) 10:00～15:00
内 容：一般入試対策講座(12月のみ)、模擬講義(3月のみ)、
キャンパスツアー、各種相談コーナー他
問い合わせ先：入学センター TEL 0798-51-8543
- 第12回こどもサイエンス体験教室
日 時：2016年3月21日(月・祝) 10:00～12:00 予定
場 所：理学館またはホルブルック館実験室
参加費用：無料・申込み要
問い合わせ先：人間科学部事務局
TEL 0798-51-8553 E-mail:taiken@mail.kobe-c.ac.jp

めぐみ会主催行事

2015年度めぐみ公開講座

- 2015アートセミナー
古都の美術、探訪(全2回)
日 時：第1回：2015年11月30日(月) 13:00～14:30
運河の街ブリュージュ(ベルギー) ～「中世の秋」の美術を訪ねる～
第2回：2015年12月7日(月) 13:00～14:30
アンデスの天空都市クスコ ～標高3000メートルのキリスト教美術を訪ねる～
講 師：大阪大学文学研究科准教授、神戸女学院大学文学部非常勤講師
岡田 裕成 氏
会 場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円(学生は無料) ※要予約(HP可)
- 2015キリスト教セミナー
旧約詩編：賛歌を読む(全3回)
日 時：第1回：2016年2月3日(水) 10:30～12:00
詩編をどう読むか？ ―類型研究から踏み出して
第2回：2016年2月17日(水) 10:30～12:00
詩編8編とその文脈 ―苦悩の現実から踏み出して
第3回：2016年3月2日(水) 10:30～12:00
詩編33編とその文脈 ―神殿の信仰から踏み出して
講 師：神戸女学院チャプレン・大学文学部総合文化学科教授 飯 謙 氏
会 場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：各回1,000円(学生は無料) ※要予約(HP可)
- 2015外国語教室特別講演会
健やかなコミュニケーション講座
～何気ない一言で人を傷つけていませんか～
日 時：2016年1月27日(水) 13:30～15:00
講 師：神戸女学院大学人間科学部心理・行動科学科 客員准教授 森 真佐子 氏
会 場：神戸女学院めぐみ会館
受講料：無料 ※要予約(HP可)
申し込み・問い合わせ：公益社団法人神戸女学院めぐみ会
TEL 0798-51-3545 URL:http://www.megumikai.or.jp/

●「Vistas」アンケートのお願い●

神戸女学院大学広報誌「Vistas」をご愛読いただきありがとうございます。
P.17～18にアンケートハガキがございますので、皆様からのご意見・ご要望等をお寄せください。

―※行事について特に記述のないものは、基本的に申し込み不要・無料です。―

- 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会 〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1 / E-mail kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
- 表紙解説：この春、本学音楽学科舞踊専攻を卒業し、オランダの名門ダンスカンパニーであるネザーランド・ダンス・シアターに入団した三崎彩さん。(本編に記事掲載)